資料・その他

臨床検査技師を目指す大学生は患者・家族の闘病記から何を学ぶか

森　慶輔

足利大学教職課程センター

要旨

【目的】臨床検査技師を目指す大学生が患者・家族の闘病記を読むことでどのようなことを学ぶのかを明らかにすることを目的とした。

【方法】X 大学で 2017 年度前期に開講された，臨床検査技師を目指す大学 2 年生を対象にした「カウンセリング」の講義において，患者・家族の闘病記を読み，その闘病記に基づいたプレゼンテーションを実施させた。そして自分が読んだ闘病記と他の学生のプレゼンテーションの内容に関するレポートを提出させ，その内容について分析した。履修者は 35 名，そのうち分析対象者は 28 名であった。

【結果】レポートを意味内容の類似性により分類したところ，患者・家族の闘病記を読んで，思ったこと，学んだことについては「患者の個別性への気づき」,「患者は前向きに闘病していることの発見」,「臨床検査技師の患者・家族への関わり方の再考」の 3 カテゴリーに，他の学生の発表を聞いて，思ったこと，学んだことについては「同じ疾患の患者であっても，患者と家族でも心理状態は異なる」,「患者の家族も辛い思いをしている」,「臨床検査技師の患者・家族への関わり方の再考」の 3 カテゴリーに，それぞれ分類された。

【結論】臨床検査技師を目指す学生にとって，患者・家族の闘病記を読むことで患者やその家族の心情の個別性を理解したり，患者やその家族への関わり方を再考する一助になることが明らかとなった。

キーワード：臨床検査技師，闘病記

Ⅰ．はじめに

臨床検査技師 Clinical laboratory technologist とは，厚生労働大臣の免許を受けて，臨床検査技師の名称を用いて，医師又は歯科医師の指示の下に，人体から排出され，又は採取された検体の検査として厚生労働省令で定めるもの（検体検査）及び厚生労働省令で定める生理学的検査を行うことを業とする者をいう[1]。

フライとオズボーンが2013年に発表した“The Future of Employment：How Susceptible are Jobs to Computerisation?”によると，20年後に臨床検査技師の仕事がなくなる確率は90％といわれている[2]。これは臨床検査技師が担当する検体検査業務は急速に機械化（AI化），デジタル化が進み，AIに取って代わられることを背景にしている。こうしたことから，臨床検査技師は，生化学的検査を実施したり，チーム医療に参画したりと，AIでは代替不可能な，患者や多職種と密接に関わっていく業務に今以上に携わっていくことが求められるが，臨床検査技師を目指す大学生の一部には患者と関わることが少ないからという理由で進路選択をした学生もいて，患者や家族と関わるという意識が希薄であるように感じられることがある。これからの臨床検査技師はAIでは代替不可能な，患者やその家族と密接に関わる業務に携わっていくことが求められていると言える。こうしたことを考えると，臨床検査技師が患者やその家族の心理背景を理解して関わることで，今まで以上に臨床支援に寄与できると考えられる[3,4]。

こうした大学生に患者や家族と関わるという意識を持たせるとともに，患者や家族の心理はケース毎に異なることを知ってもらうにはどうすればよいかと逡巡していたところ，看護師等の医療従事者の教育において，患者や家族の闘病記，つまり患者や家族が語る経験（当事者のナラティブ）を用いる取り組みがなされ[5～11]，患者や家族の闘病記に触れることで有意義な学びがなされていることを知った。例えば，中島，今堀，中森他[5]では，緩和ケア論実習を履修した看護学生ががん患者の闘病記を読むことで，患者の病気の捉え方や辛さ，対処方法などを知り，患者視点から検討を深める機会になったことが，越智，大東，菅野他[6]では，理学療法士を目指す学生が脳梗塞を罹患した患者の闘病記を読むことで，傍観者の立場から，闘病に関わる立場での（参加者としての）意識や考えが加わることが，井上，西村，松村他[7]では，在宅看護論を履修した看護学生が難病患者の就労支援に関する闘病記を読むことで，患者の身体的苦痛や難病であるがゆえの苦悩や将来への不安といった心情を理解する機会となることが，大西，森尾[8]では，闘病記を用いたビブリオバトルにより看護学生の視野が広がることが，岡本，高橋，江頭[9]では，看護学生が基礎看護学実習後に闘病記を読むことで臨地実習の体験を振り返りつつ，患者の立場に立ち返ることが可能となったことが，土屋，與那，渡辺他[10]では，薬学部1年生を対象とした授業で闘病記を読むことで，患者の心理，患者を取り巻く家族，友人，医療者の存在への関心が深まったことが，門林，真部，小濱[11]では，看護学生が闘病記を読むことで患者の多様な生き方，病気や死との向き合い方，痛みが身体的だけでなく精神的，社会的にも影響を及ぼすことなどを理解する上で有用であることが報告されている。

このように先行研究では闘病記を用いた授業実践の効果が報告されているが，臨床検査技師の養成課程における取り組みの報告は存在していない。そこで本稿では，臨床検査技師を目指す大学生が，患者・家族の闘病記を読むことでどのようなことを学ぶのかを，提出されたレポートから明らかにすることを目的とした。

Ⅱ．方法

1）研究対象者と分析対象者

研究対象者はX大学で2017年度前期に開講された，臨床検査技師を目指す大学2年生を対象にした「カウンセリング」の講義を履修した35名であり，そのうち，研究に協力を申し出た学生28名を分析対象者とした。（28名の平均年齢，性別および「誰がどの闘病記を読んだのか」は後述する倫理的配慮のため不明である。）

2）研究デザイン

学生から提出されたレポートを，意味内容のまとまりごとにデータを分け，類似した意味内容を持つものを集めてカテゴリー化する質的研究法である。

3）データ収集方法

講義内で，任意の患者・家族の闘病記を読んでのプレゼンテーションを実施した。プレゼンテーションは4授業回に分けて実施され，1人あたり8分の持ち時間とした。学生は任意の患者・家族の闘病記を読み（Table 1参照），プレゼンテーション用資料を作成することが求められた。プレゼンテーションでは「読んだ本のあらすじ」「その本で扱われた病気，ケガに関する説明（どういう病気，ケガなのか／治療法と予後など）」「読んでの感想，学んだこと」を説明するように指示した。そしてプレゼンテーションが終了した直後の授業においてレポートを作成させ，提出を求めた。レポートは，「1）患者･家族の闘病記を読んで，思ったこと，学んだことを，なるべく具体的に述べなさい。」「2）他の学生の発表を聞いて，思ったこと，学んだことを，なるべく具体的に述べなさい。」「3）「患者・家族の闘病記を読む」の講義を受けての感想を述べなさい。（良い面，悪い面を含めて。なお悪い面を書いても成績に悪影響はありません。）」「4）総合的に考えて，今回，「患者・家族の闘病記を読む」の講義を受けてよかったですか。1.よくなかった～5.よかった，のうちから当てはまる選択肢を1つだけ選んでください。（悪い評価をつけても成績に悪影響はありません。）」とした。後述の倫理的配慮により，提出されたレポートを返却した後に，個人情報の処理を施したレポートのコピーが再提出されたもの（28名分）を分析対象とした。

4）分析方法

提出されたレポートのうち，「1）患者・家族の闘病記を読んで，思ったこと，学んだことを，なるべく具体的に述べなさい。」「2）他の学生の発表を聞いて，思ったこと，学んだことを，なるべく具体的に述べなさい。」について分析を行った。分析はレポートに記載された内容を，意味内容のまとまりごとにデータを分け，類似した意味内容を持つものを集めてカテゴリー化した。

5）倫理的配慮

倫理的配慮として，プレゼンテーションを実施する初回講義時に研究趣旨を説明するとともに臨床研究に関する説明文書を配布した。文書には，研究への参加はまったくの自由意思によること，研究に協力しなくても不利益が生じないこと（成績評価に関係がないこと），研究協力に関して個人が特定されないようにすることなどを記載した。個人が特定されないことを担保するために，提出されたレポートを返却する際にレポートの原本とコピーを配布し，再度研究趣旨を口頭で説明した上で，本研究に同意する学生には名前，学籍番号等を黒塗りし，個人が特定できないようにしてコピーを再提出するように依頼した。なお，コピーの提出をもって研究に同意したと見なした。また本研究はX大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施された（承認番号：PAZ16-30）。

Ⅲ. 結果

1）患者･家族の闘病記を読んで，思ったこと，学んだこと

患者・家族の闘病記を読んで，思ったこと，学んだことに関する記述について分類した（Table 2参照）。「ステージ4のがんはもう諦めるしか方法はないものであると勝手に想像して，思い込んでいただけであったのだと感じた」「患者さんの心情は人によってさまざまであることが分かりました」といった【患者の個別性への気づき】，「病気を患ったとしても，周りの環境から離れるのではなく，可能な範囲で社会生活を続けることが，結果的に，精神状態を良好に保ち，病気に立ち向かう力になるということを学んだ」といった【患者は前向きに闘病していることの発見】，「改めて医療にかかわることは人の命を預かり，行動や発言に気を付けなければいけない立場であることがわかった」「私も将来，医療従事者として患者さんの選択を尊重した対応ができるようになりたいと思った」「医療従事者の態度が想像以上に悪くて衝撃的

Table 1　学生が読んだ患者・家族の手記

著者	書名	出版社	出版年	病名
清水彰・清水秩加	川崎病にかかった小さな命	かもがわ出版	1996	川崎病
河合香博	春よ，もう一度 アルコール依存症闘病記	シングルカット	2000	アルコール依存症
佐藤律子	種まく子供たち	ポプラ社	2001	小児癌
瀬川秀樹	405日のいのち，きらめく	慶應義塾大学出版会	2002	房室中隔欠損症，胆道閉鎖症
小笠原勝美・小笠原靖子	ぼく，何も悪いことしてないのに	文芸社	2002	悪性リンパ腫
有馬啓之	それでも僕は笑っていたい	文芸社	2003	骨形成不全症
平野美津子	たくさんの愛をありがとう―末期ガンの夫と共に	日本基督教団出版局	2003	脳腫瘍
鈴木中人	いのちのバトンタッチ―小児がんで逝った娘から託されたもの	致知出版社	2003	神経芽腫
木藤亜也	1リットルの涙―難病と闘い続ける少女亜也の日記	幻冬舎	2005	脊髄小脳変性症
木藤潮香	いのちのハードル―「1リットルの涙」母の手記	幻冬舎	2005	脊髄小脳変性症
飯島夏樹	ガンに生かされて	新潮社	2005	肝臓癌
ＴＢＳ「イブニング・ファイブ」	余命１ヶ月の花嫁	マガジンハウス	2007	乳癌
横山友美佳	明日もまた生きていこう―十八歳でがん宣告を受けた私	マガジンハウス	2008	横紋筋肉腫
関原健夫	がん六回，人生全快	講談社	2009	大腸癌，心筋梗塞
スパリゾート井上＆妻・玲子	夫の月収10万，妻は乳がん 貧乏夫婦乳がん治療奮闘記	茜新社	2009	乳癌
関根友実	アレルギー・マーチと向き合って	朝日新聞出版	2009	アトピー性皮膚炎ほか
堀江良一	風にのって―死から蘇ったそのとき	ユア・サイエンス出版	2010	脳動脈瘤破裂
穂積良洋	ワイルズの闘病記	文芸社	2011	T細胞型急性リンパ性白血病
有村千裕	あっこと僕らが生きた夏	講談社	2011	上咽頭癌
小林和彦	ボクには世界がこう見えていた―統合失調症闘病記	新潮社	2011	統合失調症
小松武幸	ママが生きた証	講談社	2012	乳癌
安武信吾・安武千恵・安武はな	はなちゃんのみそ汁	文藝春秋	2012	乳癌
加納朋子	無菌病棟より愛をこめて	文藝春秋	2012	急性白血病
松永正訓	運命の子トリソミー―短命という定めの男の子を授かった家族の物語	小学館	2013	13トリソミー
吉野実香	癌と闘わない―私の選択 - 私の人生，私が選んではいけませんか？	ぜんにちパブリッシング	2013	乳癌
山下弘子	雨上がりに咲く向日葵のように―「余命半年」宣告の先を生きるということ	宝島社	2014	肝臓癌
中井一夫	母さん，お花の中にねんね―不妊治療，出産，乳癌　２歳の娘を残して逝ったある母の物語	不知火書房	2014	不妊，乳癌
蒔田備憲	難病カルテ―患者たちのいま	生活書院	2014	全身性エリテマトーデス
たがみさなえ	朝焼け夕富士-パーキンソン病定位脳手術を受けて11年	東京図書出版	2015	パーキンソン病
宮下洋一	卵子探しています	小学館	2015	不妊
荒美有紀	手のひらから広がる未来―ヘレン・ケラーになった女子大生	朝日新聞出版	2015	神経線維腫症Ⅱ型
野中秀訓	がんになって，止めたこと，やったこと	主婦の友社	2016	大腸癌
清水健	112日間のママ	小学館	2016	乳癌
日垣隆	脳梗塞日誌―病棟から発信！涙と笑いとリハビリの100日間	大和書房	2016	脳梗塞

注）　学生の希望により「ボクには世界がこう見えていた―統合失調症闘病記」は2名が発表した
注2）分析対象者は35名中28名であるが，倫理的配慮により誰がどの書籍を読んだかはわからないため，35名分を記載した

Table 2　患者・家族の手記を読んで，思ったこと，学んだことの記述例

カテゴリー名	感想の一例
患者の個別性への気づき	私は，ステージ4のがんはほぼ末期のがんであり，今後は悪くなっていく一方であると学んでいた。しかし，野中さんの場合は体に良いことをたくさん挑戦したことによってがんが進行し悪くなることを防いでいた。私は，ステージ4のがんはもう諦めるしか方法はないものであると勝手に想像して，思い込んでいただけであったのだと感じた。
	カウンセリングの授業で患者の心情を学んできましたが，今まで学んできた絶望感や喪失感があまり闘病記を読んでいる中では感じられませんでした。そんな中で人生は多少適当な方が楽しく，自分らしく過ごせるのではないかと思いました。また，患者さんの中にはこういった楽観的な考え方ができる患者さんもいることが分かり，患者さんの心情は人によってさまざまであることが分かりました。
患者は前向きに闘病していることの発見	私が読んだ闘病記の筆者は，癌の再発と転移を繰り返しており，本を読んでいるだけでも，筆者が次々と病気に罹っていく様子には凄まじいものを感じた。しかし，そんな中でも治療法などの情報を自身で集め，病気に真正面から向き合っていく強い姿勢には大変驚き，感銘を受けた。（中略）病気を患ったとしても，周りの環境から離れるのではなく，可能な範囲で社会生活を続けることが，結果的に，精神状態を良好に保ち，病気に立ち向かう力になるということを学んだ。
臨床検査技師の患者・家族への関わり方の再考	看護師さんや医者の何気ないたった一言で看病している両親や，治療を受けている子供が頑張ろうって思えたり，逆に不満を抱かれ，信用を失ったりすることもあることがわかって，改めて医療にかかわることは人の命を預かり，行動や発言に気を付けなければいけない立場であることがわかった。また，家族と一緒にいたいとかディズニーランドに一回行きたいとか，そういう小さな目標があるだけで，本当に治療に前向きになれたり，状態が良くなったりするのを見て，医師の腕ももちろん大事になると思うけど，患者さんの気持ちをどれだけ理解して，支えられるかがすごく大切なんだなと感じた。
	今回私が読んだ手記の主人公の奈緒さんは，治療よりも先に出産の選択をした。私たちにはどちらの選択が正しいかということはわからない。もしかしたら，正しい選択というものはないのかもしれない。しかし，奈緒さんの選択を尊重し，出産後に治療を行った病院側の対応は奈緒さんにとって最も良い対応だったのではないかと思った。私も将来，医療従事者として患者さんの選択を尊重した対応ができるようになりたいと思った。
	医療従事者の態度が想像以上に悪くて衝撃的だった。十分な説明をしないで治療をしたり，治療をやめたりしていて，自分が患者の立場だったら嫌だと思った。読んだ本に出てくる医者のほとんどは，「仕事」として患者に接しているだけで，寄り添っているように思えなかった。（中略）私も，将来検査技師として病院に勤めることになったら，患者に対しての説明は怠らず，患者が不安に思うことはできるだけ取り除きたいと思う。

だった。（中略）私も，将来検査技師として病院に勤めることになったら，患者に対しての説明は怠らず，患者が不安に思うことはできるだけ取り除きたいと思う」といった【臨床検査技師の患者・家族への関わり方の再考】の３カテゴリーに分類された。

２）他の学生の発表を聞いて，思ったこと，学んだこと

他の学生の発表を聞いて，思ったこと，学んだことに関する記述について分類した（Table3参照）。「患者によって病気との向き合い方は異なっており，心理状態は決して１つのパターンで決まっているのではなく，その患者の性格や年齢，取り巻く環境等によって様々なのであると学んだ」「患者本人と家族では心情に違いがあることを感じた」「同じ病気の手記だとしても，患者さんひとりひとり思うことが違っていて，医療従事者となって患者さんと接していく上でとても参考になる内容ばかりだった」「今回は34という限られた数ではあるが，これだけの多くの病気とそれにかかる人の分だけ，感じること，考えること，受ける治療，かけられる言葉があるということを学んだ」といった【同じ疾患の患者であっても，患者と家族でも心理状態は異なる】，「患者さん自身も，もちろんつらいが，そんな辛そうにしている患者さんを見守る家族も同じくらいつらい思いをしていることを学んだ」といった【患者の家族も辛い思いをしている】，「医療従事者の発言を患者やその家族が批判する，という場面があった。このことが，私たちのこれからの人生に与える影響はとても大きいと思う」「医療行為において精神的な気配りは欠かせないものなのだと学んだ」「医療従事者は何気なく発した言葉が患者を傷つける事がある事を頭に入れて行動するべきだと思いました」といった【臨床検査技師の患者・家族への関わり方の再考】の３カテゴリーに分類された。

Ⅳ．考察

患者・家族の闘病記を読んで，思ったこと，学んだことに関する記述から【患者の個別性への気づき】，【患者は前向きに闘病していることの発見】，【臨床検査技師の患者・家族への関わり方の再考】の３カテゴリーが，他の学生の発表を聞いて，思ったこと，学んだことに関する記述から【同じ疾患の患者であっても，患者と家族でも心理状態は異なる】，【患者の家族も辛い思いをしている】，【臨床検査技師の患者・家族への関わり方の再考】の３カテゴリーが抽出された。門林，真部，小濱[11]は闘病記には病気ではなく患者個人を見てほしいというメッセージが込められていると同時に，学生が患者や家族と医療者とのズレに着目し，患者たちの想いや病気そのもののプロセス，病気を抱えての生活，患者を支える人たちの実際を知ってほしいと述べている。そして先行研究では，闘病記を読むことが患者視点からの影響を考える学修機会となり[5]，闘病に関わる立場での（参加者としての）意識や考えを学生に加え[6]，たとえ難病であっても患者が充実した生活が送れることを知った[7]ことが示されている。今回こうしたカテゴリーが抽出されたことは，先行研究と同様に，患者･家族の闘病記を読むことで，患者の心情を患者視点で考えることを意識させることに繋がったと言えよう。

また土屋，與那，渡辺他[10]では学生の患者理解が深まり，医療人としての自覚が高まったと報告されているが，今回の結果も，自分たちが臨床検査技師として患者やその家族に関わる立場であることを意識させることに繋がったと言えよう。

今回，筆者が担当した，臨床検査技師を目指す学生を対象とした，X大学のカウンセリングの講義における「「患者・家族の闘病記を読む」の講義」を通して，患者・家族の闘病記を読むことは，患者やその家族を理解する一助になり，有意義な学びに繋がることが明らかとなった。先行研究において対象が看護学生であることが多かったが，臨床検査技師を目指す学生であっても同様の結果となったと言える。そもそも闘

Table 3　他の学生の発表を聞いて，思ったこと，学んだことの記述例

カテゴリー名	感想
同じ疾患の患者であっても，患者と家族でも心理状態は異なる	今回，他の学生の発表を聞いて，あらゆる疾患に苦しむ患者の人生や暮らしぶりを知ることができた。中には同じ疾患を持つ患者についての発表もあったが，その患者によって病気との向き合い方は異なっており，心理状態は決して１つのパターンで決まっているのではなく，その患者の性格や年齢，取り巻く環境等によって様々なのであると学んだ。
	発表を聞く前は，何らかの病気にかかってしまい，闘病中のことが書かれているので，きっと辛く，苦しい体験談がつづられているのだろうと思っていたが，実際に発表を聞いてみると，病気を通して学んだことや，病気になったからこそ違う考え方ができるようになったという主人公が意外と多いように感じた。また，患者本人と家族では心情に違いがあることを感じた。家族は患者の回復を一番に願っている場合が多いように感じたが，患者は早い回復を願う一方で，本当に自分の症状は良くなるのだろうかというプラスとマイナスの感情の中で葛藤している場合が多いように感じた。
	カウンセリングの授業を受けるまでは，患者さんの気持ちをこんなにも深く考えたことはなく，今回の他の学生の発表で様々な病気の患者さんの感情を知ることができた。同じ病気の手記だとしても，患者さんひとりひとり思うことが違っていて，医療従事者となって患者さんと接していく上でとても参考になる内容ばかりだった。どの患者さんも同じ感情ではないため，一番必要なのは，その患者さんひとりひとりに合った対応だと思った。
	今回は 34 という限られた数ではあるが，これだけの多くの病気とそれにかかる人の分だけ，感じること，考えること，受ける治療，かけられる言葉があるということを学んだ。同じ病気であっても思うことは人それぞれであるため，患者一人一人，家族一つ一つにあったコミュニケーションを取ることがとても必要であると考えた。
患者の家族も辛い思いをしている	病気になるというのは患者さん自身も，もちろんつらいが，そんな辛そうにしている患者さんを見守る家族も同じくらいつらい思いをしていることを学んだ。しかし，そんな家族や仲間がいるからこそ患者さんが病気と向き合うことができるのではないか。また，苦しい時はお互いで分かち合うことができることを学んだ。患者さん自身のことを気にかけてくれる人がいるだけで心の支えになり，家族だけではなく医療従事者にも同じことが言えるのではないかと感じた。私は，患者さんの心も支えられるような医療従事者になりたいと思った。
臨床検査技師の患者・家族への関わり方の再考	何人かの発表の中で，医療従事者の発言を患者やその家族が批判する，という場面があった。このことが，私たちのこれからの人生に与える影響はとても大きいと思う。
	他の学生が読んだ手記にも医療従事者の些細な言動に対する不満が記されたものが多くあり，医療行為において精神的な気配りは欠かせないものなのだと学んだ。また，この手記の患者はこう捉えていたけどこちらの患者は違うなど（例：治療を受けて病気と闘う人・病気を受け止めて治療を受けない人，病気だと知って絶望し運命を恨む人・病気は自分に与えられた使命なのだと受け入れる人など），個々の患者によっても感じ方・精神状態は様々で，気配りをといっても一概なものではなく，その患者に合わせた気配りが必要なのだという事も感じた。その為には，患者の背景や家族構成といった情報も積極的に取り入れ生かしていく姿勢が大切だと思った。
	今回，他の学生の発表を聞いて，すべての患者さんに共通して病気の宣告を受けた際に絶望感や不安感を抱えていた事がわかりました。また，他の人の発表を聞いた中で特に印象的だったのは，患者さんの家族の人の心情についてです。それは医療従事者に対する不満や疑問でした。なぜ，主治医が変わるのか，説明が不十分である，医療従事者の無神経な行動に対する苛立ち，専門用語ばかりで話され意味が分からないなどといったものがありました。このことから，医療従事者は何気なく発した言葉が患者を傷つける事がある事を頭に入れて行動するべきだと思いました。また，専門用語だけを使って説明するのではなく，図や患者さんにわかりやすい言葉を選んで説明する必要があると感じました。また，医師同士，医療現場内においてしっかりと連携をして患者さんの治療にあたる事が大切であると思いました。患者さんに対しての対応は，患者さんへ良い影響を与える事もあれば，不安を増大させてしまい悪い影響を与える事にもなる事を学ぶ事が出来ました。以上の事から，医療従事者は治療のみの医療ではなく，患者さんに合わせた気配りをしていく事が大切であると思いました。

病記を用いた授業実践の報告は，対象が看護学生であることが多いようだが，報告が多いわけではない。本研究の対象は臨床検査技師を目指す大学生であるが，看護学生に対する授業実践と同様の結果が得られており，看護師養成における授業実践にも寄与すると考えられることから，一定の意義があると考える。

提出されたレポートを見る限り，臨床検査技師を目指す大学生が患者･家族の闘病記を読み，当事者のナラティブに触れたことで，患者やその家族の心情を理解しようとする，そして患者やその家族に臨床検査技師としてどのように関わるべきかを考える機会となったようである。また提出されたレポートには，「この講義を受けなければ，私は患者の気持ちを考えることのできない人間になっていたかもしれない。」「検査をして的確な結果を出すことだけが臨床検査技師の仕事ではないと，改めて思うことができた。」といった記述もあり，患者・家族の闘病記を読むことは，患者や家族と関わるという意識を高めることに繋がり，医療従事者を養成する上で非常に有意義であることが確認できたので，今後もこうした取り組みを継続していきたいと考える。

最後に，本研究の限界を挙げる。カウンセリングの授業では，患者・家族の闘病記を読んでのプレゼンテーション以外にも，患者や家族の心理に関する講義も行っている。筆者が担当した授業を履修している学生を対象に，授業内で提出されたレポートを分析しているため，講義の内容もレポートに反映されていると考えられるため，一定のバイアスが生じていることが挙げられる。また倫理的配慮の結果，どのレポートがどの闘病記を読んで書かれたものかを特定できないため，闘病記の種類や特性（患者の闘病記なのか家族の闘病記なのか，どういった疾患なのか，患者の性別や年齢等）を考慮することができず，詳細な分析ができなかった。これらは今後の課題である。

謝辞

Ｘ大学で2017年度前期に開講された「カウンセリング」の講義を履修した学生の皆さんに感謝申し上げます。

引用文献

1）臨床検査技師等に関する法律（昭和三十三年法律第七十六号）https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=333AC1000000076（2023.1.1参照）
2）Frey, C. B., & Osborne, M. A.：The Future of Employment：How Susceptible are Jobs to Computerisation?. Oxford Martin School Working Paper; 2013.
3）伊藤美智子. 臨床の現場に出てわかること. 私の実習日誌. Medical Technology. 2001；29：1241.
4）松永秀幸. こころに残りて. 私の実習日誌. Medical Technology. 2001；29：891.
5）中島優子，今堀智恵子，中森美季，他．コロナ禍における闘病記を用いた緩和ケア論実習の取組みと課題(実践報告). 京都看護. 2021；5：85-87.
6）越智淳子，大東貢生，菅野圭子，他. 医療系学生が闘病記を読むことの意味　第1報. 佛教大学社会学部論集. 2019；68：79-86.
7）井上葉子，西村和子，松村あゆみ，他. 在宅看護論における難病患者の就労支援に関する授業の学習効果【第3報】闘病記の感想文の分析から. 奈良学園大学紀要. 2018；8：13-19.
8）大西安代，森井理恵. 実践報告 看護学生へのビブリオバトル(闘病記編)の教育効果について. 看教. 2017；58(12)：1018-1022.
9）岡本寿子，高橋康子，江頭典江. 基礎看護技術演習に闘病記を用いる教育効果. 京都看短大紀. 2011；36：77-85.
10）土屋明美，與那正栄，渡辺謹三，他. 闘病記を読む―薬学導入教育としての展開. 東京薬大研紀. 2010；13：69-75.
11）門林道子，真部昌子，小濱優子. 看護学生

が闘病記を読む意味について：成人看護論
での闘病記を用いた授業，５年間の報告．
川崎看短大紀．2006；11(1)：13-18．

受付日　2022年11月11日
受理日　2023年　2月　6日

What do students who want to become clinical laboratory technicians learn by reading the publication of stories by patients or their families?

Keisuke Mori
Teacher Training Center, Ashikaga University

Abstract

【Purpose】The purpose of this study was to clarify what college students who want to become clinical laboratory technicians learn by reading the publication of stories by patients or their families.

【Methods】In a counseling class at X University, the students read the publication of stories by patients or their families and gave presentations about them. Students submitted reports on their own readings and presentations made by other students, and I analyzed the reports. 35 students took the class, 28 of whom contributed to the study.

【Results】Report descriptions were classified according to content similarity. What they thought and learned by reading the publication of stories by patients or their families was classified into three categories: “Awareness of the patient's individuality”, “Discovering that the patient is fighting the disease positively” and “Involvement of clinical laboratory technologists with patients and their families”. What they thought and learned by listening to other students' presentations, was classified into three categories: “The psychological state of patients and their families differ even when they have the same disease", "Patients' families are also suffering" and "Involvement of clinical laboratory technologists with patients and their families”.

【Conclusion】The reading of the publication of stories by patients or their families by students who want to become clinical laboratory technologists led to an understanding of the individuality of patients and their families, as well as to a reconsideration of how clinical laboratory technologists relate to patients and their families.

Key words : clinical laboratory technicians, the publication of stories by patients or their families.